

紙版 **ハコブネ×ブックス** vol.13  
<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐ web サイトです。

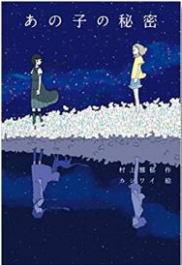


**蝶の羽ばたき、その先へ**  
 第44回日本児童文芸家協会賞

作者 森埜こみち  
 出版社 小峰書店  
 発行 2019年10月  
 ISBN 978-4338287210



新学期の日の朝突然、耳鳴りに襲われた中学二年生の結。ひと月我慢を続けた後、お母さんに症状を打ち明けて、ようやく耳鼻科に行くことにしたものの、検査を受けても原因がわからず、医師は様子を見ているだけ。埒があかず、大きな病院で検査を受けて判明したのは、この症状は早期治療を必要とした突発性難聴であり、もはや聴力の回復は難しいという状態でした。片耳がほぼ聴こえない状態でも、もう片方の耳も同様の状態になる可能性もある自分を、結はどう受け入れ、また、そうした自分を人にもどう受け入れてもらったのかと悩みます。沈み込んでいた日々、偶然、手話で会話をしながら笑いあう人たちを見かけて、市の手話サークルに参加し、新しい自分を見つけ出す姿が、冴えわたる文章で描き出されます。



**あの子の秘密**  
 第49回日本児童文芸家協会 児童文芸新人賞

作者 村上雅郁  
 出版社 フレーベル館  
 発行 2019年12月  
 ISBN 978-4577048504



教室で孤独に過ごす小学六年生の女の子、小夜子は、転校生の明来（あくる）の屈託のないフレンドリーな態度に嫌悪感を覚えます。小夜子は明来が教室で自分を演じていることに気づいていました。実際、明来は触れた人の心を読める特別な力があり、そのため気持ち悪いと思われ、そのため警戒して、細心の注意を払いふるまっていたのです。明来も小夜子の心の中にいる「見えないうただち」を見てしまい戸惑います。距離を置いていた二人でしたが、小夜子の大切な「友だち」が行方不明になる事件が起き、唯一、小夜子は助けを求められることになりました。難しい関係の二人が友情で結ばれるにはどうすれば良いのか。複雑に入り組んだ心の綾をひもとき、心の底の中に見せる勇気が輝く物語です。

特集 **協会賞メジャー化計画**

もし現代児童文学のベスト作品を読みたいと思われるのなら、日本児童文学者協会（児文協）と日本児童文芸家協会（児文芸）が選出する協会賞受賞作をおすすめします。児文協は児童文学作家他による文学運動団体。児文芸は児童文学を職業とする人たちの職能団体。半世紀以上の歴史を持つ両団体は、それぞれ日本の児童文学を発展させるための活動を行っており、その一環として昨年一年間に発行された児童文学作品から協会賞および新人賞を選出しています。ところで、現在の国内児童文学を代表するのはPOPに飾られて平積され、図書館では予約でいっぱい、とはなっていない現状があります。面陳さえされていないんだから。高く評価された折り紙つきの作品であるのに読者の目に届いていない無念さに、両協会賞受賞作を本屋大賞並にメジャー化するという大胆な極秘計画が開始したのです（ごく個人的に）。



**アドリブ**  
 第60回日本児童文学者協会賞

作者 佐藤まどか  
 出版社 あすなろ書房  
 発行 2019年10月  
 ISBN 978-4751529423



イタリアのトスカーナに暮らす少年、ユージ。十歳の時にコンサートで聞いたフルートの音色に魅了されて、経験もないままに受験した国立音楽院に、その才能を期待され合格します。やがて十五歳になり自分の将来を見据えたユージは、己の才能に自信が持てず、また制約の多いクラシックに熱意や覚悟を失いつつありました。そんな時、スカラ座の首席奏者、マウロ・ビーニの指導を受けたことで転機が訪れます。音を楽しめ、そして客を楽しませる。クラシックだってお客さんを喜ばせるエンターテインメントだ。その言葉が停滞していたユージの心を動かします。クラシックの中のアドリブを模索し、自分なりの音楽を聴かせようとひたむきに音楽と向き合うユージ。コンサートの高揚と限らない称賛と喝采を、溢れる音楽とともにイメージできる快作です。



**富士 茄子牛 焦げルギー**  
 第53回日本児童文学者協会新人賞

作者 たなかしん  
 出版社 BL出版  
 発行 2019年11月  
 ISBN 978-4776409243



正月。おかしな初夢を見たというおとん。茄子牛に連れて行かれた富士山で餅を振る舞ったところ、富士山に願いごとを叶えてもらえないことになったと言います。いつも失敗する焼き餅を焦げないようにつけて欲しいという、しようもない願いが、現実には叶ったことで、「ぼく」とおとんは、もうひとつの願いごとで、亡くなったおかんを生き返らせようと考えます。一方、おとんの願いごとのせいで、餅どころか、すべてのものがどんなに焼いても焦げ目がつかなくなくなり、世界的なパニックが引き起こされます。ぼくに託された願いごととはどう使われたのか。焼けているのに焦げない、行き場を失った悲しみの行方を考えさせられる、ハイセンスなユーモアが溢れる傑作です。古典的な願いごとをめぐる物語の常套が胸に響きます。



毎年、受賞作となった児童文学作品には、意欲的な試みと進取の気性を感じます。過去に遡り、歴代受賞作を読むことで、その時代に児童文学が到達した場所を再発見できるでしょう。



第43回児文協賞  
**マレスケの虹** (森川成美)  
 小峰書店 2018年



第59回児文協賞  
**むこう岸** (安田夏菜)  
 講談社 2018年